様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １５ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１３３３８

研究課題名（和文）ハシディズム伝承の再構成と近代ユダヤ・ルネサンス運動に関する発展的・思想史的研究

研究課題名（英文）An Expanded Ideological Research on the Reconstruction of Hasidic Tradition, and the Modern Jewish Renaissance Movement

研究代表者
平岡　光太郎（Hiraoka, Kotaro）

同志社大学・研究開発推進機構・嘱託研究員

研究者番号：００７８０４０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：20世紀の代表的な思想家の一人であったマルティン・ブーバーは、18世紀中頃に起きたハシディズム（ユダヤ教敬虔主義）を19世紀末から20世紀初頭の世紀転換期に新たに語りなおした、「ネオ・ハシディズム」の中心にいた一人と見なされている。ブーバーによるハシディズム伝承の再構成は「近代ユダヤ・ルネサンス」の枠組みにおいて実施され、シャイ・アグノンがパートナーであった。見解の相違もあったことから、それぞれが独自に伝承に取り組むこととなり、共同作品としてハシディズム集成が刊行されるには至らなかった。本研究では、ブーバーのハシディズム受容、ブーバー、アグノン、ショーレムの3人の聖性理解に着目した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、20世紀前半の「ユダヤ・ルネサンス運動」において、マルティン・ブーバーやシャイ・アグノンがハシディズム伝承の再構成に取り組んだ一端を明かにした。彼らによって再構成された作品を通じて、西欧のユダヤ人が東欧のハシディズムを再発見して、その文化的アイデンティティを獲得していった。
本研究は特に、ブーバー自身のハシディズムの再発見に着目し、彼の宗教的な回帰のきっかけとなった『ラビ・イスラエル・バアル・シェムの遺言』の版を特定した。ブーバーが手にした、聖性に関する異読含む版は、既存の研究で特定されていなかった。
近年、イスラエル社会でもブーバーが再評価されているため、その基礎研究には意義がある。

研究成果の概要（英文）：Martin Buber, who was among the influential thinkers of the 20th century, was one of the central figures of “Neo Hasidism” trend of thought. Between the end of the 19th century and early 20th century, Neo Hasidism trend, retold anew Hasidism thought and beliefs through placing on writing events, which occurred around the middle of the 18th century. In the framework of “Modern Jewish Renaissance", Buber dealt with reconstructing of Hasidic tradition, and Shai Agnon was his collaborator to the task. Corpus Hasidicum, their large project did not materialize in a published form, for difference in opinions between the two Scholars. The current research paid extensive attention to Buber's acceptance of Hasidism, and to the interpretations of the concept of Holiness by three Jewish Scholars and writers: Buber, Agnon, and Scholem.

研究分野：思想史

キーワード：ハシディズム　ブーバー　アグノン　ショーレム　ユダヤ・ルネサンス　シオニズム　ユダヤ思想

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

一般的に、近代ユダヤ・ナショナリズム研究では、現実の政治活動に重点を置いた「政治シオニズム」が考察される。しかし近代ユダヤ・ナショナリズムは、かならずしも政治的言説として明示的に構成されたわけでなく、文学・芸術・学問などの振興・復興を通じた共同体の再生を語る文化的言説の内でも醸成されたのであり、これを見逃すことは偏ったナショナリズム理解という問題に至る。20 世紀初頭に各国でナショナリズムが徐々に席巻する中で、ユダヤ人内部の状況を見ると、一方では、「ユダヤ人問題」を国家建設によって解決を目指す政治的シオニズムの立場の人々がおり、他方において、ユダヤ・アイデンティティを「宗教」として理解し、自身のいる国のナショナリズムに同化して生きることを目指す人々もいたマルティン・ブーバー（Martin Buber,1878 – 1965）はユダヤ・ルネサンスに着目し、ユダヤ文芸の復興を訴えた。彼の訴えの影響もあって、すでにパレスチナの地でヘブライ語によって作品を書いていたシュムエル・アグノン（Shmuel Agnon,1888 – 1970）は、1912 年にドイツへ移住した際、大きな歓迎を受けることになる。のちにアグノンがイスラエル国家で「国民作家」として位置付けられることを考えると、ユダヤ・ルネサンス運動にアグノンがいかに関わったことを調査することは必須であり、同時にこの運動の火付け役とも言えるブーバーについての調査も必須であると言うことができる。ドイツに来たアグノンとブーバーは、共同でハシディズム伝承の再構成に取りかかるが、1924 年 6 月にアグノンの家が火事になったことにより、彼はすべての本と手記を失う。これによりブーバーと共同で取りかかった伝承の再構成計画は頓挫し、二人は各自で再構成を試みた経緯がある。

２．研究の目的

近代ユダヤ･ナショナリズムはどのように形成されたのであろうか。この問いに答えるために、本研究では、20 世紀初頭にドイツを中心に起こったユダヤ文芸とその精神の復興を目指す運動である「ユダヤ・ルネサンス運動」に着目し、政治シオニズムが目指したのとは別のユダヤ・ナショナリズムの在り様を明らかにすることを目的とする。具体的には、ユダヤ・ルネサンス運動の在り様を確認し、運動へのブーバーとアグノンの関わりと両者の知的交流を調査し、彼らの思想に見られる共通性と差異を明らかにする。また 18 世紀に東欧で勃興したハシディズム運動に関する作品などを中心に、ブーバーとアグノンの伝承の再構成を比較することで、思想・哲学を軸にしたブーバーと、文学を軸にしたアグノンの違いを解明することを試みる。

３．研究の方法

近代ユダヤ・ナショナリズムは、政治シオニズムのうちだけではなく、文化ナショナリズムともいえるユダヤ・ルネサンス運動の中で生成された経緯がある。政治シオニズムではなく、20 世紀の中央ヨーロッパにいた若者の多くが、ブーバーやアグノンの著作に大きく感化されたことを踏まえ、彼らのハシディズム文学作品の在り様を検討することが特色である

ハシディズム研究の大家であるゲルショム・ショーレムは *Major Trends in Jewish Mysticism*（1941）において、ブーバーのハシディズム理解が邪道で非歴史的であると痛烈に批判した。近年、ショーレムの影響力もあってか、「ブーバーのハシディズム理解は不正確で、役に立たない」というような言説をよく耳にする。しかしながら、ショーレム自身が、*Von Berlin nach Jerusalem*（1977）において、彼をハシディズム研究に向かわせた要因の一つとしてブーバーの著作を挙げていることを鑑みるならば、ブーバーの著作を完全に無視することは、別の非歴史的な理解を生むことになる。本研究においては、ショーレムの歴史研究ではなく、ブーバーとハシディズムに

関する共同作業をしていた、アグノンの著作と共に「伝承の再構成」という観点から考察することが独創的な点である。

４．研究成果

2017 年度

4 月から 7 月まで、8 月に開催される 17th World Congress for Jewish Studies での発表の準備をした。8 月のエルサレム滞在の折、イスラエル国立図書館のブーバー・アーカイブで、ドイツのアグノン宅が火災にあった際、焼け跡からでてきた Corpus Hasidicum の映像資料の閲覧を許され、この資料データを受け取った。またヘブライ大学の Zev Harvey 教授と、ブーバーの神権政治理解とハシディズムの関連性について意見交換した。ベン･グリオン大学の Jonathan Meir 教授と、20 世紀のユダヤ人によるハシディズム受容について意見交換した。上記の国際会議において、Martin Buber and Shmuel Yosef Agnon in Jewish Renaissance のタイトルで研究を発表した後、テル・アビブ大学の Dan Laor 教授と焼け跡から出てきた資料について意見交換した。またテル・アビブ大学の Ran Margolin 教授とバアル・シェム・トヴ理解について、ベン・グリオン大学の Zeev Gries 教授とブーバーのハシディズム理解について知見提供を受けた。エルサレムからの帰途、ベルリンに滞在し、ポツダム大学の Admiel Kosman 教授とブーバーの思想について、同大学の Ronen Pinkas 博士とフランクフルトにあり、ブーバーとアグノンが所属した自由ユダヤ学院について意見交換した。同時期にベルリンに滞在していたバル・イラン大学の Avidob Lipsker 教授にアグノンに関する知見提供を受けた。

9月2日に日本宗教学会において「シャイ・アグノンのバアル・シェム・トヴ理解」の題目で発表、12月2日に開催された日本ユダヤ学会の関西例会では「20世紀におけるハシディズム受容」の題目で研究を発表した。

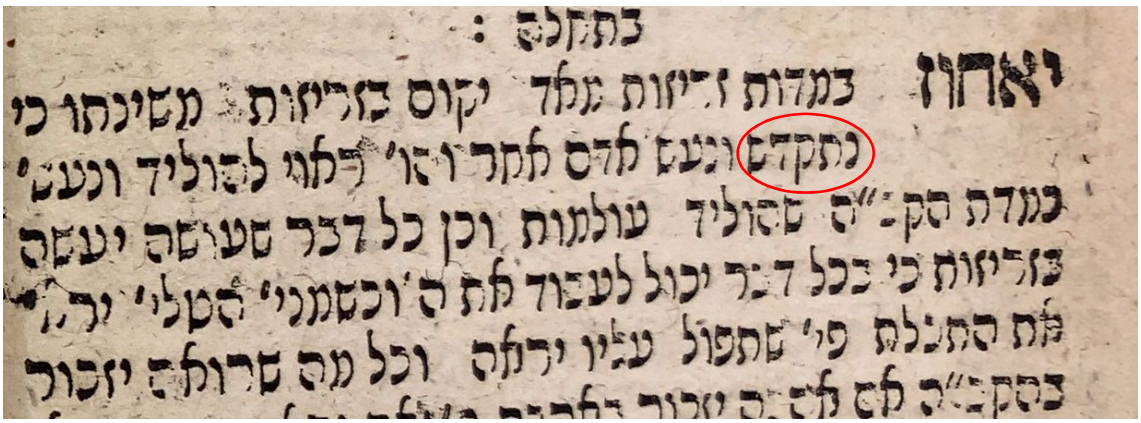
2018年度

4月から7月にかけて、8月にヘブライ大学で開催されるシンポジムのために、発表原稿の作成に取り組んだ。またシンポジウムの企画・調整に取り組んだ。8月8日～17日におけるエルサレムでの滞在期間に、イスラエルの国立図書館へ行き、図書館内でのみ閲覧可能であるいくつかのハシディズム原典を確認したところ、マルティン・ブーバーのハシディズム理解を肯定する資料が見つかった。シンポジウムでの発表原稿にこの発見に関する内容を追記した。8月19日に、同志社大学神学部と一神教学際研究センターならびにヘブライ大学人文学部主催によるThe Third Symposium on Jewish Studiesが開催され、その中で、Martin Buber’s Reception of Hassidismの題名で発表した。8月25日よりドイツへ移動し、ベルリンで研究滞在をした。ベルリンに研究滞在中のバル･イラン大学アビドブ・リプスケル教授と会い、ブーバーが読んだであろう、ハシディズム原典の資料について意見交換した。またポツダム大学のブーバー研究者である、Admiel Kosman教授ともこの資料について意見交換した。京都ユダヤ思想学会の『京都ユダヤ思想』第7号（2）、ブーバー特集号のための原稿を推敲した。2020年3月末に、本研究成果の一部を公開講演として発表するため、アダ・コヘン教授とこの講演会に関する打ち合わせをした

2019年

4月から7月までは、8月のエルサレムでの研究調査の準備期間として、青年期ブーバーのハシディズム受容、シャイ・アグノンの聖性理解、ゲルショム・ショーレムによるブーバーの聖性理解批判などを資料調査した。6月に京都ユダヤ思想学会のブーバー特集号が刊行され、論文「マルティン・ブーバーのシオニズム思想の特徴—「神権政治」と「聖性」理解を中心に—」と、ダン･ラオール教授による論文の翻訳である「アグノンとブーバー—ある友情の物語、『ハスィデ

ィズム集成』の発端と結末」が掲載された（論文タイトルに「ハスィディズム」表記を利用）。2019年8月から9月まで、エルサレムに研究滞在した。エルサレムの国立図書館にて、アグノンの著作における聖性理解に関わる資料を取集し、調査した。これにより、アグノンが特に、ヘブライ語の聖性について言及が多いことが明らかになった。「アグノンの家」博物館を訪問し、研究部門責任者のRabbi JeffreySaks氏と会い、アグノン著作における聖性について意見を交換した。国立図書館では、ブーバーが若かりし頃に読んだ『ベシュトの遺言』の複数の版を調査した。通常広まっている版とブーバーが読んだ版のあいだに違いがあることを発見した。これにより、ブーバーによるテクストの誤読、またテクスト内容の意図的な変更ではなく、彼による逐語的な翻訳の結果だったとことが明らかになった。ヨナタン・メイール教授と会い、『ベシュトの遺言』の複数の版について、またブーバーの読解と翻訳について意見交換した。



ブーバーが読んだのと同じユダヤ歴5557年（1796or1797）のリヴィウ版
赤丸で囲った文字が他の版には見られず、ブーバーに影響を与えた「聖化される」という表現
（イスラエル国立図書館：資料番号 75A867、バーコード 1945130－30）

10月に、本年度の研究成果をまとめ、日本ユダヤ学会2019年度学術大会にて「マルティン・ブーバーとゲルショム・ショーレムによる聖性についての論争——ハスィディズム理解を中心に」の題目で研究発表した（発表題目に「ハスィディズム」表記を利用）。2019年11月から2020年3月まで日本ユダヤ学会での研究発表をまとめ、学会誌に投稿した。2020年3月に、ブーバーの聖性受容に関する公開講演会を企画したが、新型コロナウィルスが原因のため、これを2021年3月に延期した。

上記の研究活動と成果を踏まえ、以下のことが明らかになった。20 世紀初頭にマルティン・ブーバーなどは、政治シオニズムの代替案として、18 世紀中頃に起きたハシディズム（ユダヤ教敬虔主義）という宗教的運動に着目した。ブーバーはハシディズム伝承を新たに語りなおした、「ネオ・ハシディズム」の中心にいた一人と見なされている。ブーバーによるハシディズム伝承の再構成は「近代ユダヤ・ルネサンス」の枠組みにおいて実施され、アグノンが共同事業者であった。見解の相違もあったことから、それぞれが独自に伝承に取り組むこととなり、共同作品としてハシディズム集成が刊行されるには至らなかった。ハシディズム伝承の再構成を試みる際、ブーバーがテクストを改変することに柔軟であったのに対し、アグノンはテクストを書き変えることに消極的であった。

ブーバーは『ベシュトの遺言』の読書中に、自身の「聖化」を通じてハシディズムを受容しており、以後、様々なものに「聖性」を見出すようになる。晩年に至るまで「聖性」はブーバーに

とっての重要なテーマであった。アグノンの思想においては、ヘブライ語という言語がもつ「聖性」がより重要であった。ゲルショム・ショーレムによるブーバーの聖性理解の批判は、ブーバーが没して 1 年後の 1966 年から本格的に展開されるものであり、ブーバーが反論できない状況でなされたものであった。ショーレムからすれば、ブーバーがハシディズムにおける聖性に固執し、またアグノンを賞讃する際に「聖性」を使用したことは、理解しがたいことであった。ショーレムのブーバーに対する反論は、「ブーバーが日常の聖化という合言葉において宣言したもののいとも極端な定式化は、まさにカバラー文書に存在する」①という主張である。ショーレムによれば、ブーバーが聖化をハシディズムに限定すること、またブーバーが鋭く対立したグノーシス主義を含みこんだ、カバラーに聖化を認めないことが問題であった。

本研究を通じて、これまで不明であったブーバーが読んだ『ベシュトの遺言』の版を特定したこと、この版に「聖性」に関わる異読があることを発見したことが新たな知見であった。またショーレムによるブーバー批判の日本語版に、「精神集中」と「密着」というユダヤ神秘主義における重要なキーワードが抜けていることを発見した。これは日本語版が元にしたドイツ語版において、ショーレム自身がキーワードを削ったことが原因であった。年代的には一番古いヘブライ語版にこれらのキーワードを見つけることが出来るため、二人の聖性に関する議論を考察する際には、ヘブライ語文献を参照する必要も明らかとなった。

引用文献

①ゲルショム・ショーレム『ユダヤ主義と西欧』、河出書房新社、1973 年、188 頁。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Kotaro Hiraoka	４．巻 3
２．論文標題 Martin Buber’s Reception of Hassidism	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Judaism in Modern Era Interpretative Studies of Ancient and Current Texts (PROCEEDINGS of The Third International Symposium on Jewish Studies)	６．最初と最後の頁 pp. 95 - 101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 平岡光太郎	４．巻 14
２．論文標題 ー書評ー　堀川敏寛著『聖書翻訳者マルティン・ブーバー』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 一神教学際研究	６．最初と最後の頁 104－109頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Kotaro Hiraoka	４．巻 14
２．論文標題 Book Review: Toshihiro Horikawa, Buber as Bible Translator	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Journal of the Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions	６．最初と最後の頁 pp. 107 -112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 平岡光太郎	４．巻 第7号（2）
２．論文標題 マルティン・ブーバーのシオニズム理解の特徴　－「神権政治」と「聖性」理解を中心に－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 京都ユダヤ思想	６．最初と最後の頁 154－166頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Dan Laor （翻訳：平岡光太郎・小野文生）	４．巻 第7号（2）
２．論文標題 アグノンとブーバー　―ある友情の物語、あるいは『ハスィディズム集成』の発端と結末	５．発行年 2019年
３．雑誌名 京都ユダヤ思想	６．最初と最後の頁 268－335頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　3件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Kotaro Hiraoka
２．発表標題 From Abravanel to Buber
３．学会等名 First Young Scholars’ Research Group Workshop（CISMOR）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kotaro Hiraoka
２．発表標題 Martin Buber’s Reception of Hassidism
３．学会等名 CISMOR and the Faculty of Theology, Doshisha University andThe Faculty of Humanities, The Hebrew University of Jerusalem（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kotaro Hiraoka
２．発表標題 Martin Buber and Shmuel Yosef Agnon in Jewish Renaissance
３．学会等名 The 17th World Congress of Jewish Studies（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 平岡光太郎
２．発表標題 シャイ・アグノンのバアル・シェム・トヴ理解
３．学会等名 日本宗教学会第76回学術大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 平岡光太郎
２．発表標題 20世紀におけるハシディズム受容
３．学会等名 日本ユダヤ学会2017年度関西研究例会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 平岡光太郎
２．発表標題 「ハシディズム文献」再構築の試み ―マルティン・ブーバーとシャイ・アグノンを中心に―
３．学会等名 基盤研究（A）「ユダヤ文献」の構成の領域横断的研究――伝統文献概念の批判的再構築に向けて」（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 平岡光太郎
２．発表標題 マルティン・ブーバーとゲルショム・ショーレムによる聖性についての論争――ハスィディズム理解を中心に
３．学会等名 日本ユダヤ学会2019年度学術大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考